

ハムレット

日下部正哉

前論（弘前大学「人文社会」第21号，1960）ではハムレットの感情の吐露である独白を中心に作品を見、彼の激情、自責の中から彼に一貫するものを求め、それを彼の誠実と純粹真剣な情愛であるとした。なお其際彼の感情と理性が作る大きな振幅、結果を計る合理性、更に彼の目的が世の歪みを正すことにあることを述べておいた。

本論は主に行爲の面でハムレットを見ようと思う。それは独白には感情が、行爲には理性が現れると思うからであり、独白と行爲、感情と理性の両面を併せて、ハムレットの人柄がきまり、作品の正しい解釈が成り立つと思うからである。

ハムレットの理性

彼の理性が継続した働きをはっきりと見せている箇所は、まず無いと言ってよいだろう。併し、前論にも触れたように、思考、批評、反省、計画、効果の計算などの形で頻繁に現れている。又素早い理解、鋭い洞察、機に臨み変に応じて喚突する才気、相手と場合に応じて彼が駆使する多様の意味を持つ含みの多い言葉などは、彼のすぐれた知力を表し、それも彼の誠実に基づいて、彼の人柄と一体の知力として、人間ハムレットの知の働きとして現れている。

彼はトロイ叙事詩に感動し、暫くしてのち激しい自責の独白に入るが、そのあいだ彼の激情は強く押えられて翳ほども顔に現れない。それだけでなく、その間、彼はポローニウスに役者達を扱う心得を諭し、亡霊の言葉の真偽を自分の眼で確かめる計画を立て、それに自分の言葉を加える構想を立て、更に役者に、『あの男をからかうなよ』と親切な心使いをしてやる。『やっと一人にな

れた』と言うまでのこの抑制に、彼の激情に見合う彼の理性の強さを見るなら、彼の自責の激情の吐露に感歎すると同様に、彼の理性の力に驚歎せずにおれないであろう。この激しい独白そのものでも、半ばを過ぎた処で彼の反省と思考が頭をもたげ、彼が計画した夜の演劇の意図と意義が、ずっと落着いた調子で述べられる。深い憂鬱の淵に沈んで、彼がそのまま露と消えるかと思える懊悩を吐露する第一独白は、父の急死と母の再婚の二つの時を正しく刻み、激しく揺れ動く彼の感情のその裏を理知の見事な線が貫ぬいている。この独白の終りに、『不吉なことだ、よい結果になる筈はない』という言葉があって、彼の理知が彼の意識の表に現れてくる。

この激情と、それに見合う強い理性は、ハムレットの長所である。併し前論に論じた様に、又上の例で明らかな様に、彼の内のこの二つの長所は調和した形で外に現れないで、その間にずれがある。そして感情は理性を麻痺させることなく、理性が感情を冷却することがないから、彼はこの二つの大きな振幅の内を揺れ動いて苦しむ。之は彼の様な人柄の宿命である。この不調和が、後述する様に、彼の運命をつくる。ホレイショウでも、王子と同じ条件の下に置かれたら、同様の激動の苦を体験しただろう。ハムレットが彼より大きく見えるのは、主役ということや身分よりも、この激動の中で前進をやめず自己を練上げてゆく、その人間の成長にある。

この理性の働きには一つの特徴があり、それは国外追放の時迄一貫して存続する。効果を計り結果を考え過ぎることである。例えば、生か死か、の問題で、彼の思考が死後の煩いに迄及ぶのはこのせいであり、又『この様にして意識が我々全てを臆病者にするのだ』という「意識」は結果を計る理性である。王をためす演劇は彼の理性がたてた計画であるが、それも効果を計る処から生れ、演劇で真実を確認する迄始終王を彼が刺戟挑発するのも、後述する様に、効果を計算してのことである。祈る王を見逃すのもそのせいである。上述の第一独白の懊悩の中でも最後は結果を考えるのである。併し劇中劇の王は『考えるのは我々だが結果は別のところで起る』(3. 2. 223)と言う。そしてハムレットが「結果を思い煩いすぎる」(4. 4. 41)と反省するのは離郷直前である。彼が

効果結果主義を捨てることは「運命」を知ることであり、知ることによって運命の上位に立つことである。併し彼の結果主義は既にほぐし得ぬ死の運命の糸を彼によっていたのである。後述する様に彼は効果を計って佯狂した。同じく効果を計算して佯狂のテストにオフィーリアの愛を利用した。これがポローニアスの人柄と結んで彼の刺殺に到り、レアチーズの復讐、愛人の狂気を導くのである。

今第一幕の第一独白と、上述の演劇計画を述べる独白を、理性を中心にして比べると、彼の理性は後者に遙かにはっきり現れている。中心を感情に置いて見ると、前者は激しく人を責め、後者は激しく自分を責める。この変化の間には、彼に於ける最初の転期が潜んでいること、そしてその自責も彼の理性の働らきから由来すること、が次項以下で自ら明かになるであろう。

ハムレットは抒情の独白だけで十分悲劇的である。併し彼を悲劇の主人公にする主要素は彼の行為である。その行為の主特徴は彼の理性である。感情は常に未知数を残す。彼の感情に惑わされ、その未知数が重なると、得体の知れぬ人間像が出来る。我々は彼の内に理性を見落してはならない。激しい感情と強い理性、彼は感情に於て20才の青年であり、理性に於て30才の大人である。そこにハムレットの本当の姿がある様に思う。

ハムレットのオナー〔名誉〕

ホレイショウの言葉、「心の眼を痛める埃」(1. 1. 112)「最後の審判の日を迎えた様に」(120)から「翼振る天使の群が」(5. 2. 371)まで、キリスト教信仰の言葉が、この作に無数にある。中でも第一独白で寺院法を犯した母の罪を悩む王子の苦しみは深刻で真実である。その深い傷は寢室の場まで彼の心の中に生々しく口を開いており、尼寺の場でイーブの原罪の歎きとなって現れ、又自分を神の前に罪人として、甚だ傲慢で、執念深く、野心強き男と言う。又亡霊は聖餐礼も塗油式も受けず殺され、生前の罪業を煉獄の責苦で贖っていると語る。ハムレットがそれを真実に受取っていることは、祈る王を見逃す時の彼の言葉に照らして明白である。

併しハムレットの第一独白冒頭での肉体の汚れの嫌悪には、従って原罪の歎きにも、自然によって結ばれている骨肉の繋がりが含まれている。それはリアがリーガンに『お前はわしの血、肉、わしの娘だ。いやこの肉に潜む病だ………』(2. 4. 224)と言うのと同じものである。自分自身の人生体験に基いて、死後の世界は未知と言い、死ぬ時は神の慈悲を祈るでなく「あとは沈黙」と言う。骨肉の歎きや恨み、不実な人間の侮蔑、更に復讐の堅い意志は随所に見られるが、彼が神に祈る姿は何処にもない。彼は彼の苦しい人生で自己を離れることなく、死ぬまで自己を立て貫いている。デンマーク王の臥所を近親相姦の情欲の寝床にしてはならぬ(1. 5. 82)と言う亡霊の言葉には、王家と国の名誉が含まれており、秘密の真相を明かす時の呼懸け「汝高貴なる青年よ」(38)は直接復讐の期待と繋がっており、「高貴なる」は我が骨肉の繋りと名誉を重んずることを知っている父の言葉である。子は父をハイピーリオン、ジョーブ其人、として尊敬している。又ホレイショウも、チャーミアンの様に、ハムレットの死に殉じようとするのである。此の作の基調は異教倫理の心情である。基督教信仰は、謂ば観念として働いているにすぎない。そしてハムレットの理性はアキナスの神の光、神の知に通じるのではなく、人倫の理性、名誉と不可分の理性であることが判る。祈りの場の彼の残酷な心情もこの観点から理解されねばならぬ、死ぬ時の彼の願いは神の許にある魂の永生ではなく、死後に誉れの名を残すことである。この心情の消足はブルータスの死(シーザー、5. 5. 24-60)に明らかである。

第一独白の歎きには、宗教と人倫の二つの悩みがとけ合っている。「バルカンの鍛冶場」(3. 2. 89)という言葉、又ポローニアスの「国王には忠誠を神には魂を捧げる者」、又モーアの崇高な言葉「第一に神の僕次に王の僕」に伺われる様に、時代が誠実名誉と敬虔篤信の調和を保っていて、魂の救済を神に求める信仰と人間として名を惜む人倫の二つの価値体系が調和していた時代である。若し王子に、「この美しく頭上にひろがる蒼穹」(2. 2. 312)の下で、人間を「その行い天使に似たるもの」と見つづけることが許されていたら、彼の名誉と篤信の調和は破れず、恐らく彼の願いであり、其為に文武を練って来た

と思われる、「美しい国」の実現を成就し、彼はその国を飾る「バラの花」として気高い生涯を終えたであろう。しかし運命はそれを妨げ、亡霊の話を聞くに及んで、彼は人間に絶望し人生に幻滅したのである。亡霊との対面を境にして、誠実名誉と敬虔篤信の間の調和が破れ、以後信仰は観念として働くものになり、彼の独白も行為も、彼の誠実名誉の気質心情に癸するものとなる。

名誉は誠実をその質として初めて真に存在する。誠実は自然の情に従い人倫の理を守ることである。父母に何んな欠点があろうと敬愛を捧げて孝順であり、自分が愛し敬う人に生涯変らぬ誠を貫き、虚偽を嫌い、恥を知り、如何なるときも堂々所信を述べ、且つ行うことである。（この親子の自然を逆手に使って自己の野心の手段にしたのはエドモンドと、リアの二人の娘である。）それは勇気ある心の美德であり人生の経験に於て自己を確立する力である。これは封建の儒教倫理によって、今日もなお日本人の気質に生きているものである。名誉は、この様にして鍛え上げた自己の、人間としての価値を、その真価に於て世人の前に発揮することであり、且つその真価に対して世人から受ける尊敬と名声である。誠実も名誉も、肉体的生命以上に大切な自己の生命である。それは人倫に基いて国、社会の秩序美風を支える力である。名誉はモールドンの詩に歌う老執事の誠実、剛勇、恥を知る心であり、王子が遠征のフォーチンプラスを評して「神々しい野心」と名付けるものであるが、それは日常生活の全てにモラルとして重大な意義を持つ。ポローニウスが下僕に、『息子を不名誉にする様な無茶は言ってはならぬ』と注意するのは、彼の本当の心を言っている。娘の誠実名誉は父の敬愛と淑徳である。妻のそれは何よりも夫への貞節である。父に誠実な恋人を王子が厳しく責めるのは、識らずして行っている罠が名誉に反するからである。母を慨くのは、宗教上の掟と同じく、後述する様に、母が名誉に外れているからである。彼が王を責め、又自責するときの下郎、百姓奴隷、無頼の徒、等々は身分卑しく教養なく、人倫を外れて恥を知らぬ者を指している。彼が小さな汚点一つで全ての美德が世人の眼に失われる（1. 4. 15以下）と言うのは、個人や国の名誉を尊ぶ心である。彼の仕事はデンマークの人倫の乱れを正し、名誉の国に返すことである。

基督教は汝の敵を愛せと言う。名を重んずる異教倫理は復讐、決斗を名誉とする。但し敵の名誉はこれを正しく認め重んずる。誠実名誉を缺き、恥を知らぬ敵は極度の侮蔑をもってこれを斃す。基督教は神と人間の交りを説く。異教倫理は人間と人間の誠実なる交りを薦める。それは恋愛と境を分たぬ友情、所謂刎頸の交りである。ホレイショウは劇の人物として、又ハムレットに対して、些か超然としている様に見える。彼は最も必要な時に最も適切なことを簡潔に言う人である。二人の交りは一言一瞥で事足りるのである。王子は性格、知力、教養、勇氣全て優れた人である。余計な忠告出者張りは無用である。じっと控えて真剣に王子を見守っている。王子が彼の「誠実公正な」(3. 2. 59) 人柄を讃えて多言を費すとき、彼は意外な面持ちでいる。そして王子の死に殉ずる人である。これはハムレットが誠実な人であったということである。(誠実によって交りに信頼が生れるのだから、庶民の上に立つ王者が誠実であってこそ美しい国が生れる)。そして悲運の王子は自分の名誉を彼の手に託す。作者はここに美徳の交り⁽¹⁾を描いているのである。ホレイショウは劇の人物として、王子を無言で支え、且つ作品の意義を鮮明しているのである。

『前を遮ぎってやる、呪を受けてもかまわぬ』(1. 2. 127)と言うホレイショウは真の勇氣のある人である。その彼が最初に亡霊を見たその後で「震え青ざめている」(53)。ハムレットも『そのものが氣高い父の姿を仮りていたら話しかけてやる、地獄が口をあけて黙れと叫ぼうとも』(1. 2. 244)と言い、亡霊に会った後は陽気である。尤も寢室の場に明らかな様に対面のあいだ中、彼の眼は異様に輝き髪は逆立っていたであろうが。併し之等は特に彼の勇氣を示すものではない。それは寧ろ自分の「生命をピン一本の値打にも思っていない」(1. 5. 65) 深い憂鬱と、『僕の運命が大声で呼んでいるのだ』(81)という期待から生れてくるものである。『邪魔だてすると亡霊にするぞ』も同断である。此の場の彼の勇氣は、祈りの場に照らして明らかな様に、彼が亡霊の一言一句を確りと聴き止めている沈勇にある。亡霊は『復讐の覚悟十分と見た』(31)と言う。我子を知る父は、息子の意志と勇氣と手練を認めているのである。フォーチンブラスは「華奢なまだ若葉の王子」(4. 4. 48)であり、又彼の終幕の言

葉からみれば、ハムレットの武名は近国に聞えていた様である。スパイ達に自分の秘密の根の深さを暗示する言葉を始終吐くのは、王を刺戟挑発し、不安を募らせ、神経を苛立たせる計算であろうが、敵の前に自分を投げ出した大胆さが見える。父王の武威は遠国にまで響いた。墓掘人もそれが自慢である。ハムレットはレアチーズ出癸後即ち亡霊対面の時から、再び武を練っている(5. 2. 221)。仇討のためと共に、寧ろそれ以上に、もともとからの心得、即ち王者の資格として。リアが国王の資格を見せる最後の行為は牢獄内で士官を締殺す勇気である。

王はハムレットが国民に愛されていることを四幕で二度言っている(3. 4; 7. 18)。墓掘人も『どんな阿呆でも知ってまさあ。ハムレット王子が産れなされた日だからね』と言っている。ハムレットも国民の愛を知っていて、文武に励み、美しき国の実現を期していたであろう。オフィーリアが、ほんとに高貴なお心、宮廷人、武人、学者の鑑、あの気高くて類い無く御立派な理性(3. 1. 158以下)と言うのは彼女だけがそう思うのではあるまい。誠実、文武、理性、高貴は全て名誉の、従って王者に不可欠な、美德である。

ハムレットの幻滅

一幕一場は質問形が多く、慌しい軍備、亡霊の二度の出現など、闇の中に疑い、怖れ、不安定な気分が漲っている。二場の国务会議では、王は王子の柔順を切望し、王子は王子で母に恨みと歎きを訴えて父生前の母、今は幻と化した十倍も母らしい母を慕う。第一独白は一見断定的であるが実は内に現実のものの価値に就ての強い疑いを含んでいる。亡霊に就ての矢継ぎ早の質問には期待と焦りが顔を覗かせている。全てが、現実を不安定に揺り動かしている。

その中で懊悩の王子を、亡霊対面の王子に結ぶ条が第一独白に用意されている。その一つは母の肉の惑溺の歎き(144)、父と伯父の間の落差(140)、近親相姦の歎き(157)の、内に閉ざされた懊悩が、亡霊の言葉と一致していることである。従って陋劣な伯父に就て王子の胸に自然に起る疑惑が、対面の場の『何かあると感じた通りだ』に通ずることになる。ただ、この感応には、その根抵

に、王子が父母に捧げる誠実の敬慕、運命が呼ぶ声、が貫いているのである。亡き親を慕う源九郎狐が静がうつ小鼓の鳴りに惹かれ寄る心根である。次は、「誰にも言えぬ」(159) 閉された心の悶えから、二場最後の『武装した父の霊ノ…。何か怪しからぬ秘密があるな。…怪しからぬ所業が明るみに出るぞ、大地が覆い隠そうとも。』と外に向って開き動く、王子の心の変化である。

この様な心の懊悩と変化を内に含み、強い期待を抱いて、王子は雲間洩る月影の夜陰の中で一人亡霊と言葉を交す。明るい城中の賑かな王の祝宴を背景に、彼は其処で真実を知る。王の歓楽は非道な犯罪の上に成立っている現実である。高貴な王子は、今初めて現実とその裏面を、此の人生の二面の事実として知ったのである。自殺を願う女の性を怨み、此の世を雑草の生い茂る庭と見た懊悩は、まだ、彼が足を現実に置く情感、主観の情緒の悩みであった。今彼は現実の裏側に立ち、そこから逆に現実を見る人になった。現実を不安定に揺り動かしていたものの世界に立ったのである。それは立派な王を殺し、やがて美しい「五月のバラ」(4. 5. 157) を散らし、又優しい母を「惨めな妃」(5. 2. 344) にし、美しい現実を破壊した世界である。母の罪と墮落の懊悩は彼が現実の裏を知る幻滅に通じていたのである。その幻滅の中で、尚彼を支えるものは彼の名誉感である。実に、私は彼の心身のエネルギーの強さに感歎せずにおれない、それは彼の感情と理性との大きな振幅の關係に就ても同様である。

以後、彼は王の巧みな仮面の裏の真実を衝いて、絶えず王を挑発する。懊悩期の、冷い輕蔑の、反抗期は過ぎた。誠実は一万人に一人、頭上に拡がる美しい蒼穹は毒気の凝り固り、天使に似ていた人間は実は唯の塵埃に過ぎぬ。オフィーリアを囚に使う男が居れば、一方女はお化けの粧いに余念がない。女がこの世で誠実を通すには、尼寺に行く他ない。男も女も自分を喜ばさぬと言う彼の言葉には、幻滅を見つめている人の警告の響きがきこえる。(キーツがハムレットと同じ心情だと言い、『僕は男を憎む、女を一層憎む』とファニーに書き送った手紙には、まだ第一独白と同じく現実には足を置く人の人生執着が見えるのではないだろうか。)此の幻滅から、ハムレットの矛盾と見えるものの多くが生れる。愛情に不似合な彼の辛辣、温容と皮肉、誠実と孤絶、勇氣と沈痛、寛容と

酷烈など。之等は仇討主義の解釈からは出て来ないものである。

ポローニアスやオズリックは滑稽である。しかし専門の道化が、事もなげに次々と頭蓋骨を地上に掘り上げ乍ら人生の無を歌うとき、我々の笑いは寒々として消えるのではないか。彼は死から生を見ているのである。沙翁の道化は人生の価値を裏返えして見せる。併しこの墓掘りの様な道化は他にないであろう。王子は地上に転がり出る頭蓋骨を見て『それを見てとるこつを心得ておれば今眼の前に運命の転変をありありと見てとることが出来る。』と言う。彼が嘗て化粧の愚を説き、国王の乞食の臍内巡行論をやり、又独白の中で敗者の善が勝者の惡に待る（ソネット、66）世の姿を思ったのは、幻滅から現実を批判し、その批判を現実の人生にぶつけたのである。今場墓で彼が権謀術数の策士、延臣の阿ゆ、貴人の驕り、弁護士の利欲の空しきを言い、アレキサンダー酒樽詮の論を立て、ヨリックの頭蓋骨を手にして一時白粉を塗っても、とどのつまりは此の顔だと貴婦人に教えてやれと言う言葉は、非情の風に消えて行く。人生の苦しい体験を重ねて人生の幻滅に徹し、終に飛躍して幻滅を放下し仏教的な大悟の境地に今彼は立っているのである。アレキサンダーの論に対し、『その様に考えるのは、考えすぎでしょう』と言うホレイショウと、彼との違いである。道化は『川が人間に近付いて溺死させたら入水ぢゃない。然れば自殺の罪なき者は己の命を縮めぬのぢゃ』と言う。運命がハムレットに近づき彼を殺しても、精一杯に彼の道を進んだハムレットの生命は、それによって死ぬことはないであろう。『今暫らく死の幸福を遠慮してくれ給え、苦しいだろうがこの苛酷な世に息をつずけて』という友情の情味深い言葉も、『あとは沈黙』も、ハムレットを幻滅に据えて理解され得る言葉である。

彼は『「様子」など関知しません』（1. 2. 76）で彼の誠実を初めて我々に見せ、母の喪服は偽りであったと恨み責める気持ちを表す。亡霊は「実に美徳然たる顔の妃」（5. 46）と言う。王は「柔和な顔をした悪党』（5. 108）である。実に此の作には影と実体、肉と心、仮相と実相の対比が無数にある。仮相の世界は形の、感覚の世界、また流行むら気の世界であり、視点や嗜好に従って、又夫自身、様々に変化する世界である。一つの雲の形が〔砂漠を重い荷を

運んでゆく〕駱駝でも、〔臭くて狡くてこそそそしていて残忍な〕鼯でも、〔茫々たる大海を游弋する〕鯨でもある世界である。これをポローニアスに設問する幻滅の人は当に禅僧の如く見える。流転の裡を觀ぜずしてその相に囚われ、仮象に執する人々に野心欺瞞術数はつきものである。幻滅の王子には言葉其物も仮相にすぎない(2. 2. 194, 614 ; 4. 6. 26)。併し彼自身狂気を装い、為に恋人を誤り、仮相に欺かれ抜いた劍を鞘に納め、復讐の好機を失う。この作は仮相と実相がその生地であり、その両者を誠実の線で分ち、そこに王子の幻滅を据えた作品である。仮装と本体の關係は、早くから手法としても用いられており、沙翁の作の一つの特徴である。そもそもハムレット誕生の地盤はこうした処にあるのではないだろうか。

ハムレットは上掲の「様子」や、「父を見る様に思ふ」(1. 2. 134)から「はっきり見たかね?」(3. 2. 298),『僕は貴方の意図を見抜くチェラブを見てゐる』(4. 3. 50),そして上掲の「それを見てとるコッ」(5. 1. 99)へ、彼の人生体験を通して進んで行くのである。

物事を一般化し法則化して表すことは王もポローニアスも盛んに行う。彼等のそうした表現こそ皮難さるべきである。誠実を欠いているからである。処がハムレットの『脆きもの、汝の名は女だ!』の叫びは彼の肺腑を絞る呻きである。それは突然破れた彼の理想と、彼の誠実が癸する呻きである。この世を天国の如く人間を天使の如く見、敬慕する父母を最高天使と見て来た。彼は美しい国を作る理想と希望に燃えていた。子が父母に捧げる誠実は何時でも命をもって我が父母の恥を雪ぐものである。それはレアチーズを見てもわかるであろうし、オフィーリアの狂氣の原因の一半は父の理由不明の死にある。処が突然母が獣の性を現わし、母の方から誠実の愛を絶ち切ったのである。彼が今生きて来た美しい人生と誠実を突然覆えた母である。裏返えされた母は裏返えされた彼の人生、雑草が生い茂る庭であり、裏返えされたる女性、その脆きさである。この歎きは形而上的の普遍化でも憂鬱の誇大でも激情の飛躍でも彼の不合理でもない。其処に見るべきは、寧ろ全てに徹底する誠実である。更に幻滅に落ちて以後は、現実の裏から現実を見る彼に普遍的表現の形をとる言葉が多

くなるのは当然である。

世 直 し

父の亡霊に対面した直後の王子の「混乱した頭」は、父の煉獄の苦と現実の陋劣な裏面、今迄の彼には想像も出来ぬそうした事実を、初めて知った異常な衝撃から来る混乱である。併しこの対面により、彼は自分の人生に責任と目的を持った。今迄無価値に思った命が今大切な命になった。彼は憂鬱の谷底の重い闇から今陽光の丘に立ったのである。闇を離れたとき、眼前には嘗ての美しい人生ではなく幻滅の砂漠が広がっていたけれど、彼はそれを貫ぬく自分の進む道を見出したのである。これは彼の第一転期である。その心の弾みが『地獄も一枚加えようか?』となる。この喜びは、床下亡霊の場につき、そこではっきり現れる。(今一ツ彼が浮々する箇所がある。劇中劇のあとである。これは第二転期である。之等二ツの転期は更に平原の場の第三転期へと続き、之等は亡霊対面を起点として彼の生涯を貫く同じ一本の線上にある。)仇討は、父の亡霊の命令と彼の名誉感が誠実な彼に課する、当然の義務である。とけて露となれと言った身体に、今は『この筋肉よ、他愛なくよぼよぼにならないで、確かりしゃんとしていてくれ』と言い、王を「にこにこ顔をしていて、正体は下衆下郎だ」とはっきり評定する。誠実激情意志名誉感に駆られて直ぐにも仇討に出かけそうな勢いである。処が此の場を結ぶ彼の言葉は、『世の中ががたがたに狂っている。ああ何という悪因縁だ、この世に生れて来てそれを正す巡り合せとは!』である。彼の第一転期のこの言葉にはもっと多くの注意が注がれてよい。なぜ「世の中」なのか。裏返えされた王は王子の裏返えされた人生であり裏返えされた男性である。次にこれは一家庭内の歪みではなく王宮の墮落である。国王の墮落は附属する多くの小さいものの墮落を伴い、「国王の溜息一ツは全国民の呻き」(3. 3. 23)になる。王子は現に、『父の生前には伯父に顰面をしかねない連中が今では伯父の小型絵に大金を惜しまない』(2. 2. 381)有様を目にしている。即ち、王宮の腐敗は直接国民の腐敗に繋がり、それ自身デンマーク国の腐敗であるからである。その腐敗を直す運命を背負うたことが

なぜ「悪因縁」なのか。第一に彼はこの運命の醸成に全然無関係であり、彼は完全な被害者であるからである。次に、彼の名誉感とは宮廷の腐敗を直し世の歪みを正すことを彼の当然の義務とするが、今迄人生を美しく高貴なものに思い育てられた貴公子の背には、背負い切れない重荷だという意識或は自覚が働いているからである。彼は第一独白で真剣な気持で父と伯父をハイパーリオンとサターで比べ、それを更にハーキュリーズと彼自身の差で表した。この英雄は文武に長け艱難栄光の人生行路を選び、12の大業を遂げて、この世から人間を害し自然の道に背く悪を滅し、その努力を人類のために捧げた神である（彼が野卑なセントーの企みにおち毒のついた下衣で死ぬのは暗示的である）。今共通の仕事を前にして、彼は此の英雄神と自分を比べているのである。彼の責任を避けるのなら上の歎きはしない。この歎きは自分の卑小を自覚して尚内から彼を推し進める名誉の道を歩む意志を彼が持っているから起るのである。ただ王を刺して仇を報ずるだけなら此の作に見る武勇の王子には容易い仕事である。名誉は自己の名を惜しみ家名を尊び大義名分を重んずる。感情に促された復讐は、正義を頭に戴いても、レアチーズの様に名誉に悖り、又国を考えず群衆を煽動する軽挙に陥る。名誉は理性が伴って初めて真の名誉になる。卑怯な手段は勿論許されない。先づ母の悔悟なくして家名の挽回はない。次に事の真相は世人は知らない。これは初めから世人にその大義名分が通っている曾我物語や忠臣蔵ではない。更に彼の理性は、彼の名誉のために秘密の真偽を確認することを要求する。その上彼に寄せる国民の愛は彼は当然知っている筈であり、仇討によって廷臣に動揺を起し、国民に疑惑を残し、更に国内の乱れを誘致するようなことがあってはならない。これは単なる家庭悲劇ではない。彼と王家と国家の名誉がかかっている大問題である。煉獄の苦が魂に沁みているせいか、頻りに復讐を求め急ぐ亡霊との違いがここにある。ここに前代未聞の新しいハムレットが生れたのである。強い理性と名誉感が、折に触れて激する彼の感情を確かに押えるハムレットである。仇討の遅延はここから起り、激しい自責もそこから起る。亡霊対面後二ヶ月余真相を自分の眼で確認するまで、彼は疑うのでなく周囲の凡ゆるものを見、批判し、計り、考え乍ら目的に向って誠実

の一路を進んで行くのである。彼の思考は疑いに終るのでなく、覚悟に通じているのである。

独白、行為を通じて誠実がハムレットの性格の基本である。彼は地位財産を超えて、人をその人間の価値に於て遇し、交っては魂の交りを求める。地位財産は容易に従者追従者を作るが、彼等は劇中劇の王が言う離合集散定めなき徒輩であり、他方彼等はハムレットが言う「海綿」(4. 2. 22)である。彼がこの語を向ける狂言廻しの二人のスパイは、彼に「野心」という言葉を向ける。

ハムレットは亡霊対面直後友人達に、「ハムレットの様な貧しい男」と言うが、これは人生の充実した希望を失って幻滅に立っている自分を言っており、彼が彼等に報いると言うものは「愛と友情」、彼の恋人への贈物の場合と同じく真心、なのである。二幕二場でスパイは、彼の「野心がデンマーク国を尚狭しと思わせる」のだ(258)と彼に言う。これは次期の国王に指名されてい乍ら、それが待ち切れないでいるということの婉曲な表現であり、彼はこれを踏まえて、彼等の最後の探りを、『草がのびるのを待ってるまに』(3. 2. 358)と巧みにあしらう。上の「野心」には彼の乞食論が続く。即ち貧乏と乞食は同質である。それに対し上の野心は異質である。野心には二種ある。誠実であって名誉を求める心、上述した「神々しい野心」であって、優れた徳の源である。他は誠実を離れ、自己の価値以上の名誉を求める野望である。王とこの二人のスパイの野心である。乞食は貧乏であるが自分の価値に応じて暮らしている。乞食はより高尚である。だから乞食は本体であり王は乞食の影(269)であるというのである。それは又上述した乞食の臍内巡行論のある所以である。演劇を見て王は怒り心頭に癸した。之を見て、二人のスパイは手柄を立つるはこの時と、今迄の不実無礼を知らぬ顔で、厚かましく『貴方の友達に歎きの種をお明かしなさらぬのは自分で自分の憂悶に出口を塞ぐ様なものです』(3. 2. 351)と言う。斯て作者は誠実名誉と不誠実野心を徹底的に露わにして見せる。王子は皮肉に答えて「アドバンスメントを欠いているからだ」と言う。自分達の野心の尺度で王子を計る彼等は王位への昇進の途が塞がれているという意味にとるであろう。王子の方では、王の犯罪が明白になり王と自分が真正面から対決する

時期に入ったのだから、もうお前達がスパイで昇進する時期はすぎたのだという皮肉と、王の犯罪が確定した今名誉の仇討を遂げる途をあこれ思案しているところだ、という意味である。一幕二場の「陽にあたりすぎています」は、心の奥では誠実の愛を母の方から絶ち切られた恨を言っているであろうが、王への冷たい答えとしては王位篡奪を言っている。即ち王は要領よく顧問官会議の選挙を工作し、恥を恥と思わず、王たる資格のないその陋劣な品性を持って位に即き、父生前に彼がそのために自分を練磨し数々の希望を抱いて想見していた美しい国の実現を一挙に破壊した男、「選挙と僕の希望[複数]の間にヒョイと飛び込んだ奴」(5. 2. 65)なのである。以上によって、王位とハムレットの間には、所謂野心は全然無いことが明かであろう。『とんでもない、僕はクルミの殻に入っているでも自分を無限世界の王と思うことが出来る。』(2. 2. 260)という仮象を離脱した人の言葉を素直にそのまま受取るべきである。尚、彼がホレイショウを特に讃える処にアドバンズメントの語がある。これはその前に「へつらう」という語があり、そしてその前に二人のスパイが彼と一緒に居た、その関係を逆に迎れば語の由来は明かであろう。そしてこれが、上述した二人のスパイに対する皮肉な答えと繋っていることも、明かであろう。

伴 狂

亡霊対面のあと世直しの悪因縁を歎く以前に彼は友人達に、「今後気のふれた様子をする必要があると思うが」(1. 5. 171)今迄通り知らぬ振りをしてくれと頼むでいる。もうこの時は彼の頭の計算知が働きを開始しているのである。ではどんな数字が並んでいるだろうか。ホレイショウがつい先言った「狂気」、これは外から入った数字である。内からのものとしては、王も廷臣達も皆が知っている自分の憂鬱と、つい先自分が言った「混乱した頭」、何故なら之等は狂気と隣合せだから；現実仮相の世に栄える王の欺瞞術数に対抗し、且つそれを乗り切るには必要な手段；この仕事は王宮国家の名誉がかかっている大事業であり数日で片付くものではないから、その間胸底に生々しく傷口を開いている母の罪の苦しみと、今陥った幻滅の苦を気儘な振舞言動に転化する

ことが出来る；亡霊の真偽は今の処不明だが、公認され得る言行の自由を十分に使って、世間の慣習を外れた言行を他の人々に怪しまれることなく、真直ぐ王を刺戟挑発し、王を疑惑不安焦燥におとし入れ、そこから犯罪の真否を掴み得る可能性がある；なおそのために、凡ゆる手段を採り用いるのに好都合である、などである。

これは「様子」をすることであり芝居をすることであり、ペテンをつかって王を「鼠落」にかけることである。ポローニアスが下僕に言う様に人生の知英は多少汚れなくてはつかない、王を相手にする以上ハムレットも少し汚れざるを得ないのである。誠実な王子には却って難かしい。自信がつくまでに二ヶ月余かかった。そして先づその効果をオフィーリアに試みてみた。何故彼女に。二人の愛を利用するのは彼の誠実名誉には反するが、事は王宮国家の大事である。それに彼の心には彼女の愛をではないが、一般に女性の愛を軽視する気持が働いていたかも知れぬ。次に父生前からの二人の愛情の結びによって彼女の無邪気純真誠実は判っている、佯狂が失敗である場合も彼女なら最も安全である。次に近頃すげない風をするがこれを狂気の原因にすれば最も自然であり、又無断闖入して彼女の本心をちかに見てとることも出来る。次に佯狂が彼女に成功すれば彼女には気の毒だが、それも、大義名分に則って世直しの仕事を終え、結婚し、美しい国造りを始める、その時までの辛抱だという計算が働いたと考えてよいだろう。芝居は迫真の技をもって大成功だった。これは彼の第一転期の最初の行動である。これが失敗するのでは大事の遂行は最初から危かしい。併し、この時、彼は自分の手で自分の悲運の種を蒔いたのである。前を見後を顧みる筈の彼の理性はその計算知が、愛を計略の具として用いたからである。彼女を信頼するが故に、彼は彼女の愛に甘えた、寧ろ協力を求めたのである。それはこの場合に止まらない。後述する様に演劇の場でも同様である。

劇中劇の王は、何らか利をはかる考慮が介入すれば愛は最早愛ではないと言う。沙翁はソネツで、言葉を用いずして心が通い自他を一ツに融合する愛、全てを破壊する時や運命の玩弄物でない愛を歌っている。劇でも早くから愛の神聖をテーマにしている。リアも末娘の愛を蔑しろにしたため悲劇の主人公に

なる。ハムレットも同じ理由で最愛の恋人を狂気に追いやり、死なせ、自分も死ぬ運命を作る。『誰でも今のことは判っていますが、一寸先は闇で御座います』(4. 5. 42)は、無邪気な彼女が身辺の激変から全心をかけて学びとった人生の真理である。劇中目立たぬ乍ら、彼女の悲劇は彼女なりに大きいことに注意しなければならぬ。この「闇」は、劇中度々指摘される意志、計画、目的とその実行、結果との間の運命的なずれである。純真誠実な愛を手段道具にすることは名誉からもキリスト教的愛からも、愛の冒瀆である。

佯狂は成功した。王は絶えず猜疑と不安に悩む。早速王子の幼友達を帰国させ王子の心底を採らせる(2. 2)。ポローニウスも王子の狂気を信じこんでしまった。

妻を亡くした此の顧問官は二人の子供から誠実な敬愛を受け乍ら、彼等に心からの情愛を注いでいる。併し仮相の現実には術策を誇り「我々知英と洞察を持つ者は」と大得意で下僕に息子を偵察させ、娘を囚にする人である。彼の術策は「回り道のやり方で近道を見つける」ことで、下僕の訓辞に判る様に仮面をかぶり、スパイをすることである。囚に仕立てた娘の手に祈祷書を持たせて虚偽の手本をはっきり我々に見せるが、それは彼が権謀術数の哀れな犠牲者であることを表している。権謀術数は本来国家経綸の策である。『私がはっきり「こう」と申しまして逆目に出たことが御座いましたか』と言うのは彼の政治家としての過去の実績を言っている。処が今その範囲を超えて個人対個人の人倫の領域にそれを用いている。其処には誠実も人間の尊重もない。「政策、あの不実漢」(ソネット,124)である。しかも洞察力は既に欠け、後に哀れな形骸を残しているだけである。彼の文芸演劇の嗜みまでがそうである。その彼が尚自分を国家の大黒柱と思い、形骸の術策を振って王に忠勤を励む。そして遙に俊敏な術策家の王に唇齒輔車の関係などと煽られて巧みに利用されている。旅立つ息子に説いて聞かせる、術数の処世道の結び、「汝自身に誠実であれ」は汝の権利又は利益に忠実であれということである。「簡潔は知英の精髓」と言う彼自身甚だ饒舌である。娘によせる王子の愛は誑かしである。要するに不誠実な彼の行動は空虚な勿体振り、老獪な周到と出者張りであって、彼の横死は「自

業自得の運命」(3. 4. 32)である。「ええわしの悪推量め！」(2. 1. 113)という反省も彼の誠実を呼び起す機会にならず、頭から狂気を信じた彼は、二人のスパイを競争相手に、恋の物狂いの確証の入手に夢中になる。彼の横死は、勿論それに王子の側から働く力が加わるが、彼の性格の必然の帰結である。他方、それは王子の狂気遠国と相俟って、オフィーリアの狂気水死、誠実なレアチーズの猛烈な復讐心、そして王子の死を導く。佯狂の成功は必然の径路に於て恋人の死と彼の死に通じ、世直しの仕事は彼が想見していた形でなく、行われるのである。

ハムレットが不誠実な相手をあしらう時の言葉は難解である。併し誠実な人に対する時の言葉、母諫言の時の言葉は難解でない。難解ということは彼が現実の人生でとる佯狂が、彼の立つ人生の裏、幻滅と直結しているところに生れ、それを我々が現実人生の常識でとらえることから起る。王の秘密を確かめるまで王子が用いる利器は言葉である。我々を王子の幻滅に置くとき、彼の言葉に素晴らしい理知の働らきを見るであろう。例えば『僕は北北西に狂ってるだけだ；南風になれば鷹と青鷺の見分けがつくさ』(2. 2. 396)は、伯父＝父、伯母＝母の人倫の歪みが純風に返るまでの間の僕の苦悩だ、又は亡霊の話の真偽を確かめるまでの間の佯狂だ、という風に。又彼の行動は計算に基づいている。ポロニアス刺殺の時でさえ後述する様に、計算に基づいており、決して衝動的でない。異常なのは王子の運命であって、王子の精神ではない。王子は気がふれた様子ををすると言う。作者の言葉を我々は素直にその通りに受取ることが大切である。併し王に対し佯狂する王子は、見物にも、如何にも狂人らしく見えなければならぬ。其処に作者のマジックがある。それは作者のわざの見せ処である。それに魅せられて、王子を完全狂気とか半狂と考えるのは、我々をポロニアスに近くすることである。

劇作品・演技論

ここもハムレットの誠実を根柢に置いて見なければならぬ。彼が「悲愴な一くんだり」と言うトロイ落城の叙事詩を中に含む作品に就て、「気取りがなく」「自然に備わる美しさ」をほめ、「内容を真率に表す表現法」と評しているが、

ここでは誇張を特に問題にしてはいない。続いて叙事詩が始まる。詩が物語の筋を離れ「運命」云々の感慨になると、突然ポローニウスが『これは長過ぎる』と言う。彼にはこの生きた凄愴な絵巻は感動を与えないのである。彼は筋と用語を吟味鑑定しているからである。感動があれば詩が長すぎるということはないだろう。これは根本には聞く人の側の誠実の有無である。凡そ一国の滅亡はそれだけで十分悲愴である。沙翁は恐らく青少年期にトロイ落城の物語に感動したであろう。その感動をこの挿入詩に見ようとしなくて、唯マーロウ揶揄、ナッシュ訂正云々の説で済ませるのは沙翁を単なる才子にするものであろう。この叙事詩が王子に与えた感動は続く独白に明らかである。彼が演劇を「王の急所に探針を入れる」決め手に使うのも、その感動の故である。愈々演劇を行うに当って彼は叙事詩を朗読した時の俳優の情熱が心配になった。高い教養で育ったものには激情を「自然の節度」の中で表して、初めて心に泌むものと彼は考えているのである。彼が誇張を戒めるのは、この舞台上の演技に就てであり、特に彼は彼が挿入した部分を考えている。誇張の演技は目や耳を捕えるが心をとらえない。仮相に流れて実体を喪失する。誇張の戒めは単に彼の演技論でなく、その中に彼の祈る願いが込められている。

オフィーリアの困役

今迄彼の逸る心を押えて来た彼の理性が愈々彼の進路を決定しようとする時に当って、彼に自分の生き方即ち艱難名誉の道に就て思考させる。情緒の勝った第一独白に比べこれは内容が遙かに具体的現実的である。怖しい破壊力として作者がソネットにも劇にも用いている海をイメージにして、涯ない海の波と寄せくる人生の煩いに敢然と挑むか、という処に王子の死を賭けた前進の決意を読みとることが出来るであろう（尚特別の条件なしに A or B? と自分に問題を置くとき、B に心理的重点があるのが普通であろう）。従ってすぐ死に就ての思考がつづく。彼が死後の「障り」と言うのは此の人生と同じく死後の世界にも幻滅があることを気にしているのである。併し彼は現に幻滅を踏まえて前進しているのである。だからこれは形而上的思考でも懷疑不決断の迷いでも

ない。「旅人」という言葉がある。これは『人間は何という傑作だ！』と同じくルネサンス精神を表し、未知の世界への探険者を内容に持っている（更に我々全てが旅人である）。彼が理性によって自分のモラルを確認しているとき、彼の理性がその真偽を疑う「亡霊」をこの「旅人」と結び合せて考えることは当らぬだろう。独白は途中で切れる。オフィーリアに気付いたから。

ハムレットは王〔太陽〕が妃を死んだ〔人倫に外れた〕牝犬にして楽しんでいる以上誠実な万人に一人だ、その間を取りもった不誠実なお前のことだから娘の妊娠させ方にはよく気をつけるがいい（2. 2. 174以下）とポローニウスに諭した。併し王子の言葉を全て娘への失恋と結び合せて解釈する彼は、二人のスパイの競争相手もある（王子から見れば己惚れと阿叟の競い合いである）ことだし、自分の慧眼を実証するために御本尊と彼が思い込んでいる娘まで動員しかねない。それで王子は更にジェフタの真似をして娘を殺す〔徳性を損ずる〕様なことはするな（422以下）と教えた。処が彼は娘を囹にすることを王に申出る。王は二人のスパイでは埒があかぬので、この申出を好便に愈々自分もスパイに乗り出す。そして王子に呼び出しをかけ「偶然オフィーリアに遇う」（3. 1. 30）形にする。併し既に彼女のことを心配していた王子には偶然以上の疑いが起る。初め手軽くからかってかかる。併し彼の贈物を返すという言葉に、彼の心配が現実になったことを知り、その誠実をここまで利用される彼女の無邪気さがこわくなった。急に調子を変え彼女に貞節を厳しく説く。無邪気に騙されて罪におちるということ、それは彼の母も同様である。彼女が贈物を返えそうとした時、彼は『お前にものをやった憶えはない』と言う。彼は彼女に贈物をしたのではない、王が母を贈物で籠絡したのとは違う。僕は真心の愛を君に捧げたのだという意味である。それに答える彼女の言葉も同じ意味を言っているのであるが、自分の心を自分の言葉で言っているのだから合致しない。二人の間のこのずれは幻滅を見据えて立つ男と、未だ人生の経験が浅く、自分の誠実を仮相の世の詐術に利用されてそれに気付かぬ娘との違いから来る。彼の言葉は益々真剣に厳しくなる。彼女が未だ誠実を損っておらず、彼女は彼が真心の愛を傾けている娘だからである。彼女はスパイの出来る娘で

はない。自分が心配した通り娘まで動員した親父がスパイしていることは確かである。『父は何処?』という質問はそこから起る。彼女が最後に自分の心と言葉で歎くとき、二人の間のずれはそのままに残るのである。この様に見てくると、王子が囹の提案を耳にしたとか、尼寺の場でポローニウスが隠れていることを隠す何かの仕科をするという小学生向きの演出は不要であろう。沙翁劇の理解には言葉が常に決め手であって、我々が勝手に作品を小さくしてはいけない。

劇 中 劇

愈々ハムレットが王の罪の真否を確かめる演劇が催される。

強い人の野心は国を動乱に陥れ賢い人の野心は国を腐敗させる。王の知は権謀術数の計算知である。彼の罪は彼の理性が弱く、誠実が欠けているところから起る。彼の計算知は王子の場合と違って彼の本質であり、死ぬまで彼を離れぬ。死に臨んでの王子との相違はこうした所からも由来している。又二人の類似した多くの言葉もこの故にその内容を全く異にする。彼には名文句が多くあって育ちを現しているが、その言葉には計算が働いている。寧ろ何気なくきこえる「朝の日が山々に触れると見たら」(4.1. 29)に彼の性格的なもの、文学青年の情感を見ることが出来る。この情感が妃を慈しむものであり、妃の母性愛を重んじて、次期の王位の約束までして、王子を手懐けようとするのである。レアチーズが闖入したとき、妃も言う様に王は下手人でない、敵でない王に刃を向けるのは許されぬ下剋上である。罪なきものは怖れず位王は身に泌みて心得ている。それに所謂唇齒車輿の関係という既存事実もある。王はこの青年の一途な性格も心得ている。面と向い合った時の王の態度は、勇氣或は国王神権の威とは言い難く、上の根拠に立って作ったポーズである。知謀に勝れ虚偽が身についた大人が、激昂する青年に対して常にとる姿勢である。王子の帰国を知ると二度目の暗殺を計画する王である。恥を知らぬものに勇氣はない。ペリクリーズ一幕一場の言葉は巧知軟弱無恥のこの王を言っている如くである——『炎に煙が伴う様に人殺しと情欲は切って離せぬ腐れ縁』、『裏切と毒薬

が罪の手先で恥を阻むニツの楯だ』、『夜の闇より尚黒い所行をやって恥ぢない奴でその悪行を隠すためには手段を選ばぬ。一ツの罪が次の罪を呼び起す』、そして『王は地上の神である。……繰り返す非行は吹き迷う風に似て塵を吹きつけ人々の眼を曇らせ広く蔓る』。

演劇の直前ハムレットは王を挑発する。今迄彼の挑発は、スパイや囹を逆用して効果を挙げて来た。罪の上に成立つ王の「喜びは一寸したことも歎きの種」である。挑発は有効であった。その挑発に応ずれば、放った矢が返って自分に当たり、自らの罪を露呈する。その怖れはポローニアスの秘密葬の他彼の諸所の言葉に表れている。王に猜疑不安恐怖を募らせて来た佯狂は成功である。我々は累積する挑発の効果の中にもハムレットの前進を見なければならぬ。そして彼は今初めて、直接、王を挑発する。『僕は約束の詰った空気を食べています。去勢鶏だってそんな飼いは出来ませんよ。』である。これは王に通ずる意味だけで十分挑戦的であるが、その前半は王子の更に鋭い皮肉を含んでいる。これから真偽を確める希望で一杯のこの部屋の空気を吸っているということである。『そう、今は僕の言葉でもありませんよ。』も同様十分挑戦的である。そして実体はこれから明らかになるのだという皮肉を含んでいる。更につずいてポローニアスにシーザー刺殺のことを言わせるのも、王即シーザーの関係が、上の挑発の後だから、十分の威嚇になる。威嚇のねらいは勿論王の恐怖を煽っておいてから、自分が暗殺の事実を知っているところを見せ、王の判断力を封じて仕舞うことである。心理戦はこの作の重要な要素である。

劇の筋を表す黙劇が始まる。見物は王の反応が気になり注意を王、黙劇、王子の三方に惹かれて緊張する。そして後で、王には判らぬ「鼠落し」の意味が判っていることに満足する。黙劇は亡霊の話の通りの筋だからここで王が「ピクリ」としても王子の目的は達せられるのだが、作者はそれを王子が書いた台詞までもってゆく。王は恐怖心で王子に注意をとられている。妃はオフィーリアをより強い磁石と言った息子に注意を惹かれている。ポローニアスは自分の慧眼が王の前で実証されたと思って得意である。王子は三人の注目を集めて派手な振舞いをする。ここでも彼は恋人の愛と従順に甘えすぎる。併しここでは

同時にやくざ者の王とその情婦を真向いに見る彼の心の苦しみがある；彼の「二時間」は彼の心理的時間である。彼は暗殺者、ルシエイナスが王の甥だと特に附加えて王を脅かす。次で王子が挿入した台詞と暗殺の場がくる。その台詞は暗殺の場合の王の心を表現し、その演技はその実行を目に見せて、視聴覚を同時に用いた攻撃の強烈な効果を挙げる。王子は確証を掴んで陽気である。彼の第二の転期である。

王の祈りと母諫言の場

観劇の途中で王が突然立上った理由を知らない妃は『どうなさいました？』ときく。それに続く王の只ならぬ様子と怒りは、先夫にも今の夫にも嘗て見たことのないものである。妃の願いは愛する我子と三人、円満な家庭を楽しむことである。突然起った父と子の喧嘩で母親が先づ我が子を窘めるのは世の常識である。妃が早速この夜更けに王子を自分の部屋に呼ぶのは母の愛である。そこでポローニアスは私がスパイしますと王に申出る。理由は母の愛情が叱責の手を緩めることもあり得るからというのである。これは完全に出者張りである。彼が自慢の術策に溺れた姿である。何故なら彼がスパイするのは妃だからである。彼に王は『ほんとに有難う』と感謝する。そしてケインの罪の赦しを祈る。併しスパイの申出に感謝した心で祈りが通ずる筈はない。其処に王子が、今こそ生血も飲む残忍な心、母の魂を真ッ二ツに切裂く決心を抱いて現われる。祈る王を見て彼の誠実は、亡霊が語った父の煉獄を思い出す。それはこの場の彼の独白の言葉を亡霊の言葉に照らせば明瞭である。外道の王のその魂を救いの道が絶たれた地獄に墮すのでなければ煉獄の父の復讐にはならぬのである。この場の王子の言葉を仇討をのばす口実と見ることは、既に亡霊の真偽が定まった今、王子が父の魂の言葉を弄んでいるとすることであり、この主人公の人柄とこの作品を滅茶々々にすることである。又宗教の立場から余りにも残忍だと言う人は、異教倫理の誠実と名誉は、正義に立つかぎり、場合によっては敵の生血を飲む恨みに徹することが善れであることを知るべきである。既述した様にこれはキリスト教の立場で見る劇ではない。同様に仇討中心の劇で

もない。王子を激情弱行或は思索逡巡型等々の貴公子に変え、又それと不可分の考え方であるが、この作の主調を、運命が働らく人生の挫折感だけにする誤りの根柢には、仇討中心主義がある。仇討の遷延は王子の性格にあるが、それは既述した様に彼の理性と名誉感に由来するのである。その理性と名誉感は、之も既述した様に、彼の第一転期を劃す「世の中の閑接が外れている」云々の中に先づ含まれている。さすがにゲーテはこの言葉に早く注意を向けている。併し彼も仇討ということに捉われて、復讐の義務を樅の木に喩え王子を華奢な鉢に喩え、やがて根を張る木のために毀れて仕舞った、と挫折感に解釈している。帰国後の王子は、ホレイショウに言われる迄もなく、仇討の時期が迫っていることは承知している。併し討つとなれば「一」と唱える条忽の間に王の命を消すことは造作ない。この限られた期間を十分に利用して、祈りの場で王を見逃した理由のあの徹底した復讐の機会を、彼は狙っているのである。『その間は僕のものだ』(5. 2. 73)はこの意味である。

劇中劇の結果は彼が佯狂の仮面を捨て第二転期に入ったことである。そして暫くの間理性をもって振舞う王子を我々は見る。祈る王を見逃した事にも、又理を尽した母の諫言にも、父母への彼の誠実と彼の理性を見る。次の幕で王と廷臣を前にして国王の乞食の臍内巡行論をやるが、彼が自分の言葉に説明をつけるのはこれが初めてである。その理性的行為の中で、彼がポーニアスを今祈りの姿のままに残して来た王と思い違えて刺殺したことは、確かに平衡を失した突差の行動である(唯この場合も「鼠」〔スパイを意味するが既述の「鼠落し」とも関連するであろう〕の語が意味している様に彼は復讐の好機と考えたので彼の計算知が同時に働いている)。それは父への誠実が彼に残忍な復讐を決意させたばかりであり、他方母の罪は心の中に痛く疼いており、又母の悔悟なくして世直しはあり得ないのであって、彼の母に尽す誠実は言葉の刃をもって今母の魂を裂こうとしている時であって、響き合う二つの決意の間に思慮の入る余地がなかったと理解する外ないであろう。彼が父生前の母を思慕するさまは誠にいぢらしい。一幕で王に対する答えは冷い蔑視と反抗であるが、母には恨みと歎きを訴えている。その時の「奥方」は諫言の場では「母」になり、

王を攻撃する言葉にも、二幕二場では殺人を最初に挙げ(610)，五幕二場では王の近親相姦罪が最初にくる。そして『みじめな妃よ、さようなら!』(344)には、恨み辛みを超えて彼の心の底に深く繋がる母子の情を見落すことが出来ない。徳はお辞儀してから悪の矯正にかからねばならぬ、は彼の幻滅の言葉であり、母に「あの怪物、慣習、は自然の感情、識別を麻痺させ、着なれた悪を習性に」すると言うのは墓地での「荒さぬ手はそれだけ敏感だ」という言葉と共に、彼の生新な心の言葉である。彼は誠意を尽し、自己の全部を投入し、真剣勝負で母を諫めている。

妃の魂を二ツに裂くのは、王子が鋭く指摘する父と伯父との「落差」である。それは既に亡霊が指摘したものであり、又劇の進行の中に我々がはっきり認めているものである。この指摘によって妃は初めて恥と名誉に目覚め、自己の覚醒が起る。妃には宗教上の罪や不貞や殺人連累の意識が全然見られない。先夫の亡霊が部屋に現れていることを聞いても動揺した様子を見せず、たゞ王子の急に変わった異様な様子を心配している。何故亡霊が妃には見えぬのであろうか。マクベス其他の例の様に罪ある者にだけ現れるとすれば、王子もホレイシヨウ達も罪はない。寧ろ亡霊は姿を現わし或は語りたいと思う者にだけ現れる力を持つと解すべきであろう。

妃に不貞の罪を着せる根拠は何処にもない様に思う。例えば一幕五場38行以下であるが、これは亡霊の言葉の順序に従って理解すべきである。暗殺、贈物、妃の陥落の順序である。これは王子が上演する默劇での順序でもある。従って「淑徳づらした妃」は亡霊の一種の予弁法である。事柄の継起の順序を無視して、結果からその事柄の内容を言ったものである。それは一種の本質論である。それは『情欲は天使と交っていてもやがて飽きて臓物を貪るものだ』という断定と同じである。これは妃によせて情欲の本性を言い、且つ亡霊の歎きを表出する、情欲の本質論である。貞節と情欲の関係をこの様に白と黒に截然と分つこと、そのことが既に本質論である。これを、王子の夫々の機能に於ける考え方、相互の影響の面からの見方、例えば美の力は貞節を色欲に変える(3. 1. 112),又習慣は情欲を貞節に変える(3. 4. 160以下)という相互間の働

らきと比べると、王のは本質論にすぎぬことが一層はっきりするだろう。

自然の情の言葉「十倍も母らしくして下さるなら」(3. 2. 345) は此場の「貴方が祝福をお願いなさる心になられたら」(3. 4. 171) と同じであり、ここにも恥、名誉で妃が覚醒する異教倫理にキリスト教観念が同居している。

平原の場とハムレットの成長

王が三幕二場で王子の英国追放をポローニアスに告げるとき、王の真意の程は我々に不明である。併しその理由が王子の与える恐怖にあることは明示されている。三幕三場で二人のスパイに護送の役を命ずるときも理由は同一である。三幕四場母諫言の場で王子は英国追放に就て母に語っている。処で三幕二場、劇中劇に依て佯狂の仮面を捨てて以来、王子は正面切って王と対決の状態に入っているのだから、彼に英国追放の真意が読めぬ筈はない。彼には既にチェラブがついているのである。王子は王の裏をかく計画を持って乗船する。即ち、王子を送る以上当然英国王に宛てた王の親書がある。その内容もほぼ見透しがつく。この親書は彼の大義名分を闡明する、彼には唯一の、証拠である。彼は勇躍して乗船する。彼が乗船して第一に行ったことは、夜陰に乗じて二人のスパイから王の親書を盗み取ることであった。

その前に彼の独白がある。デンマーク平原を通過するノールウェイ軍に刺戟された独白である。即座の反応であるが、前後が断絶している一時的な衝動ではない。一貫した目的に向かって努力する心の緊張に、属目する全てのものが響く反応である。この独白で、前論に述べた様に、彼は結果を思い煩わず、名誉に向かって邁進し、且つ残忍な決意をもって事に当ることを述べる。それは彼の理性の計算知を捨てることであり、既述した様に運命を知り運命に従うことによって運命に打勝つことである。異教倫理の極致である。そこに発する彼の行動は理性が感情と一体に溶け合い、復讐と世を清める決意の厳しさをもって発現する名誉の行動である。名誉に向かって誠実と感情と理性が一つになって働く行動である。勿論、誠実と理性を欠く野獣の残忍とは雲泥の相違がある。胸底に疼いた母の傷も母の自覚によって消え去った今、この決意をもって立つ彼の

英姿に清々しいものを感じる。

帰国してからの王子は、尚幻滅を踏え乍ら、悟りをもって振舞う偉大な人物である。我々の目に彼は大きな山の如く見える。彼の周囲の人々は一際小さく見える。オズリックの使用は大団円前の言葉の遊戯の楽しみだけでなく、俗塵輕薄を偉大と対置して、王子の大きさを視覚的に見せているのである。それは海上の体験で裏付けられている大きさであり、墓地で見る王子の、幻滅に徹した人の、大きさである。帰国後彼の最初の達観の言葉は、『時にとって無謀も亦よいものだよ、全くだ、思慮を捨てるとうまく運ぶことがある』（5. 2. 7）、「荒切の儘でいっても、神意ってものがある、ちゃんと綺麗に仕上げて下さる』

(10) である。これを行為に於て常に結果を計った王子と比べると大きな隔りである。併しその間緊張した常時の努力があったからこそ、上の言葉に意味がある。之等は捨身の積極である、「飛込みてみよ生きる瀬はあり」という柳生流剣の極意である。それに対し、マタイ伝を踏えた『一羽の雀が落ちるにも特別の天意がある』、又モンテヌを踏えたと言われる『覚悟が第一だ』は静の構えである。動静一致の境地に自己を据えた大悟の姿、幻滅に徹し「残忍」に徹した、彼の場合寧ろ、剣禅一致の境地と言うべきであろうか。劇の初め憂鬱の中で命を一本のピン程の値打にも思わなかった王子と今の王子を比べて、彼の成長になお目を瞑る人があるであろうか。二人のスパイに残忍な処置を下して「出者張りの報いだ」と吐き捨てる様に言う王子は、一殺多生の理を言っているのである。

醜く死に喘ぐ王に餞むける言葉は、『お前のユニオンはここに〔この毒液の中に〕あるのか？ 僕の母の後を追え。』である。お前が仮相の世に誇る宝の大真珠、お前が罪を犯し贈物をして手に入れた母との結婚は、罪と獣欲の毒液に浸されていたものだった。今こそ、お前の誇る権勢お前が享受した結婚を、罪と獣欲の毒液と一緒に再びお前に返してやる。さあ飲んで死ね、死んで母の後を追ひ求めるがよい。現世で罪まで犯して手に入れた僕の母だ。併し既に悔悟した僕の母は天に向う、お前は自分の罪と獣欲を抱いて地獄に墮ちるのだ。そこで永劫、僕の母を求め乍ら、罪と満されぬ獣欲の苦しみにも代えるがよい。

これはそういう意味に解される。又彼は『美しい人間性を食うこの害虫にこの上の害をさせてはならぬ』(5. 2. 69)と言う。彼が後に残す自分の名誉を気遣い、死に臨み後事を託したホレイショウは、「謀計や誤りからなおこの上の不幸が起らぬ様に」(405)と言う。これは国民が誠実に生き、美しい国を作るようにという王子の願いを、彼の側から伝えている。王子は立派に復讐を遂げると共に、マーセラスが冒頭で『デンマーク国には何か腐敗したものがある』(1. 4. 90)と言ったその腐敗を輝く名誉のうちに取り去ったのである。

ハムレットには四ツの大きな特質がある。誠実と名誉、熱情と理性である。彼は熱情と理性の間に激しく揺れ、更に幻滅に立ち乍ら、自由生新の心を失わなかった。それは彼が誠実と名誉感に強く支えられていたからである。そして彼の高貴且つ強靱な精神は、之等四ツの特質を打って一丸とした偉大な人格を実現したのである。

埋 葬 の 場

この様なハムレットが、埋葬の場でなぜ、恋人の墓穴に飛び込む狂態を演じたのか。

妃が「ハムレットの妻にと思っていたのに」と愛情と善意の言葉を言う。この名前が新しくレアチーズに恨みと不憫をかき立てる（これも運命の指先のいたずらである）。それが彼の激越な振舞いになる。そしてハムレットがとび出す。その理由は、妃に答える言葉、『四万の兄弟の愛を集めてきても僕の量には及ばぬ程オフィーリアを愛していました』と今一ツホレイショウに言う言葉、『華手に誇張した歎きが僕を激怒させたんだ』である。成程彼が今迄人々の前で激情をそのまま行為に移したことは一度もなかった。又輕蔑を籠めて『大言壮語ならお前などに負けはせんぞ』とレアチーズに言っている。之等には、王子の真実な深い愛と、兄弟愛は男女間の真の愛に及ばぬものでありレアチーズの誇張の言辞（誇張は虚偽である）は真の愛を冒瀆するものだ、という考えが働いている。ハムレットの恋愛はこういうものなのである。劇は断片の集合ではないから、尼寺の場や劇中劇で彼がオフィーリアを輕蔑を以て、或は

冷淡に扱ったとするのは誤りであろう。その恋人が、暫く見ぬ間に、若い身そ
らで死んだのである。困難な戦いのなかで、心の奥に大切に抱き続けて来た純
真な恋、真の愛を突然失ったのである。『何、オフィーリアだと！』には彼の
心の驚倒をありありと伺い得る。そして愛は、この大丈夫の心を思いもよらぬ不
思議な力で吹き上げたのである。これは彼が彼の理性、思考力を失った、謂ば
狂気の行動に出た唯一の場合である。彼が仕合の前レアチーズに衆人の前で謝
罪するとき、僕のあの無礼はこの僕ではなく、僕の「狂気」がしたことだと言
う言葉は彼の真実を言っているのであって、この「狂気」は、彼の以前の佯狂
とは全く関係がない。恋人を佯狂の試験に使い、その愛に甘えすぎた悔恨は死
ぬまで彼の胸に疼いたであろう。謝罪を結ぶ「僕の兄弟」という言葉に、愛の
悔恨がにじんでのいるのを感じる。一方彼の愛はロメオがチバルトの挑戦に静か
に应えて、君を愛する訳があるんだ、『キャピュレットという名は僕の家名と
同様僕には大切なんだ』（3. 1. 74）と 言 う のと相通ずる。

ハムレットは人をその真価に於て見る。父も母も伯父も友人も恋人も全てそ
うである。彼が墓穴でレアチーズに『僕をこんなに扱う理由を聞きたい、僕は
ずっと君を愛していたのに。』と言う時、彼はポローニウスを殺したことを忘
れているのではない。併しこの顧問官は「退屈なもうろく道化」である。彼は
互いの誠実と愛に基づく、相互の尊敬を言っているのである。その通じない
男は、彼から言えば、『ハーキュリーズ程の者がどんなに骨を折ってみても猫
はニャニャ、犬はワンワン御機嫌様だ。』ということになる。

仕 合

肉身に対するレアチーズの誠実は歴然としている。又パリ出発前妹に『淑徳
そのものの乙女も月に顔を露わせば 慎みがないと言われ、美德の化身も中傷
の汚毒を免れぬものだ』と諭すのを見れば、誠実の点では、王子が「非常に高
貴な青年だ」と言う通りの人である。併し王宮で堂々と復讐の名乗りを挙げ、
臆て剣に毒を塗るに到っては名誉に欠けている。名誉に不可欠な理性を欠いて
いるのである。王子が廷臣達の前で身分に拘らず率直に詫げる時、父の死に就

ては、王も生命を狙われたことを王の口から聞いており、従って王子が「狙った矢が我家を越えて僕の兄弟を傷けたのだ」という言葉の意味は了解出来る、妹への愛も判る、王子の誠実も十分判る。彼は復讐を叫ぶ肉親の情は今の弁明で了解したが、父妹を殺された男の名誉は未だ後に残る問題だと言って仕合に臨む。彼が息を引きとる際に王子に彼の方から、互いの人殺しの罪は許し合って貸借なしで死につこう、と言う言葉は矢張り誠実な人の言葉である。

此の場には二重の復讐があり、それは二重の罠で成っている。一つは王と王子との関係で、王からはスパイの使用、英国送り、毒薬の使用等であり、王子からは佯狂、劇中劇、親書の奪取等である。これは大きな罠であり、その中でポローニウス一家と王子の間に別のより小さい罠が作られてゆく。王子の佯狂は王を目標にしたものであるが、彼はそれをもってオフィーリアを罠に落す、彼女の方は善意からではあるが囚役をする。父もその罠に落ち、スパイの罠を作り自分で自分の罠に落ちる。レアチーズは毒剣の罠をもって王子を斃すと共に「悪計がわが身に返る」。彼に対しては王子は何の罠も仕掛けなかった。この大小二重の仇討、二重の罠が、即ちこの劇の大小二重の運命を構成している。そこに王も王子も顧問官一家も共に死なねばならぬ必然が存在する。沙翁の悲劇は全てその中に裏切りがあり、それが作る大きな運命が描き出されている。この劇ではその裏切は劇以前に起り、劇の中では飼犬に手を噛まれる裏切りは全然ない。その代り、大小二つの運命が縋い合わされて悲劇を作っている。大きな罠大きな運命から見ればこの劇のやまは劇中劇であり、より小さな運命から見れば母諫言の場のポローニウス刺殺である。複雑である。

次に仕合いに就て私の想像を記してみたい。オズリックは王の計画に加わっていない。彼が兩名の仕用刀として預っている数口の剣は皆尋常である。他に部屋隅のテーブルに予備の剣が幾口か並べてある。そこに既に毒を塗った剣が混っている。王子が剣を選ぶとき、王はこの仕合の賭のことを王子に言い、王子の注意を逸らせる。その間にレアチーズはテーブルに行き毒の剣と取換える。既に王子の誠実を受け入れた彼が、その後に剣に毒を塗ることは考えられぬ。さて、王子は試合の際、毎回「いざ」と言って構えを取っている。二回つづ

けて王子が勝つ。妃は嬉しくて、王子の幸先を祝い乾杯する。レアチーズはそれが毒杯だと知っている。今迄は恥を知る心が腕をにぶらせた。併し間もなく妃は死ぬ。彼は絶対絶命の立場にある。王の陰謀が発覚しその共謀者となる恥を思えば、早く王子の身体に剣をつけなければならぬ。彼は王に「こんどは勝ちます」と言う。しかし「どうも良心がとがめる」というのが彼の心状である。互に「いざ」と言って斗う。勝負なし。突然彼は王子の不意を衝く、この時は王子に「いざ」という掛声がない。王子が自分の傷を知った。不意打と傷と、二重に名誉に反し、仕合を汚す相手の出方に激昂した王子は、飛び入って鏢ぜり合いになる。鏢ぜり合いでは相手の剣が気になり手元が留守になるものである。それにレアチーズの心には弱みがある。王子は彼の卑怯な剣を奪う、自動的反射的に彼も王子の剣を奪う。激昂した王子の剣はこの卑怯者を深く刺す。だから、彼は王子より後で傷付いて早く死ぬ。そして致死の傷を負うて、初めて彼に正しい名誉感が甦えるのである。

この劇の目的は仇討ということにあるのでなく、又仇討に関連する自然な要求、即ち仇を討った正しい人が後に生き残ること、を見せることにはない。寧ろ仇を討つ正しい立派な人が死ぬことを見せることにある。この劇は、王が悪疫には根本的徹底的な手術が必要だと言い、王子が腫物の表面の薄皮に安心して内を深く腐らせる様なことがあってはならぬと言う、その病い、腫物、即ち人生の裏側の悪、人間性の欠陥を決り出して見せ、人生の惨禍の原因を我々の前に露呈し、人間が自分の手で作る怖ろしい運命の姿を見せ、その中で生きる人々の生き方、特に気高く立派な資性の人々の生き方を見せるものである。最後に殆ど同時に死ぬ四人の人々の死ぬ前の態度には、夫々の人柄と夫々の人生の総決算が行われている。中でも作者は特にハムレットの成長を描くこと、即ち新しいハムレットを描き出すことに主眼をおいている。大衆を徳性に向って喚起する力は学説、理論にはない。これは文学と宗教が持つ力である。我々がハムレットに正しく捧げる感銘と讃歎は即ち我々の意志を誠実と名誉に向って喚起するのである。此の人生に誠実と名誉がある限り、ハムレットは憂愁の人物

としてではなく、強く気高く輝く名誉の人として永遠に生きつづけるであろう。大団円で芝居は終るが、永く意味が残る、ハムレットと人生の意味が。死は人をして最も自然に、人間人生の意味価値に就て考えさせるものである。ハムレットが『あとは沈黙』と言う、彼のその沈黙の無限の調和の中に、初めて作者の意図が達せられているものと思う。

夜の闇は去り、魔の影も全て消え、陽は今デンマークの東の山の露を踏んで登り、朝は再びデンマークの国の人々と共にある。併し新しい朝をもたらした王子を、苦痛を経て国民を愛し、仮相を離脱して王位に執せぬ、世に最もすぐれた王たるべき⁽²⁾貴い王子を、そのために失ったデンマークは、嘗て自らが征服した国の王に統治される国になったと作者は又言っているのかも知れない。エリザ朝の見物はこの劇をどういう感銘をもって見たであろうか？

此の様に論じてはきたが、『あとは沈黙』と言って死んでいった人のあとに残す映像を見つめ乍ら、この優れて気高く、逞しく、美しい魂を、私は結局自分の頭に合せて縮小しただけのように思える。

注 (1) The perfect form of friendship is that between the good, and those who resemble each other in virtues.

(Aristotle, Nichomachean Ethics, VIII. iii. 6 — H. Backham)

(2) And thus our State... will be a reality, and not a dream only, and will be administered in a spirit unlike that of other States, in which men fight with one another about shadows only and are distracted in the struggle for power, which in their eyes is a great good. Whereas the truth is that the State in which the rulers are most reluctant to govern is always the best and most quietly governed, and the State in which they are most eager, the worst. (B. Jowett, The Dialogues of Plato, p.779—The Republic, BK. VII,520)

テキストは研究社版によった。ハムレット以外の作品は、The Globe Edition によった。